会員広場

油絵の舞台

安部清明

そもそも、私が油絵制作に縁を持ったのは、遠くは65年程昔のことでございます。日米開戦に惨敗した日本がその中心地、東京が焦土と化し、町は一面の瓦礫の風景に変わりその実相は、まさには知る人ぞ知るで、あります。そういう驚嘆すべき現実に毎日直面していた。

私達子供たちの心のやり場、はけ口はこれも何と言って表現しようもなく、むなしいものでした。ベーゴマ、ビー玉、メンコ等々。これが私たちの憂さ晴らしの手段であり、方法でした。なによりも、こうした環境の中で、一番応えたのは衣食住に関わる事でした。勿論、私の家もその災難の一部でしたが、私の家族は多く、いわゆる「貧乏人の子沢山」の一軒でした。家族お互い、相互依存で、持ちつ持たれつで、暮しておりました。全てを灰燼に帰し、決してぜいたくなんぞという言葉にはまったく無縁な生活でした。

しかし、私はここで戦禍を呪うでもなく、非難するでもなく、私達のこうした状況下で、なにをなしえたか、つまり、文化というものはあったろうか、と今にいたるまで、課題でありました。勿論書物には接しました。しかし、それらの読書は私達にどんな肯定的な意味を持ったでしょう。

手っ取り早く言って、私の心を揺すぶってくれ、私に前向きに肯定的に、また否定的な刺激、意味合いを持ったのは、単刀直入に言って、図画の時間でした。また、らくがき、いたずら書きでした。その後映画、演劇、しいてはテレビジョンと時代は推移しますが。

当然のこととして、わたしの通信簿は図画は優ばかりでした。全科優でしたが、とりたてて、図画の優は嬉しいものでした。

今日私がこうして、毎日画を描いて余暇を楽しんでいられるのも、またひいては、新日美の会員として、自己の存在をアピールできるのも、以上の絵画人生の積み重ねの結果であろうと思っています。

紙面の関係上、ここに二科千葉支部展での奨励賞の作品50号を御披露したく存じます。

二科千葉支部展奨励賞を受賞した作品

懐旧の思いに、時には夢を馳せるのも一興かともぞんじます。

今年は新日美展四十回記念展、森屋治三代表の下、新しい油彩画、日本画、彫刻等々展示されるのを見るのは、私たちはまさに歴史の、取り立てて日本の絵画史上の誉ある生き証人といえましょう。これからも、個性ある展覧会が続きますよう、他人ごとではなく希望しております。

拙文を会報の一端に掲載される由名誉なことと思っています。これで、わが絵画人生ますます磨きがかかっていくと確信しております。ありがとうございます。

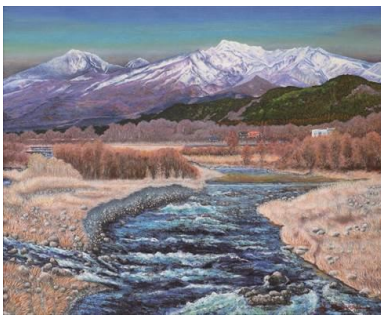
絵を描くことに出会うまで

蕪木節男

私は定年退職まで戦後の経済成長とバブルがはじけるまで全くの職場人間でした。仕事以外好きな趣味を行う時間もなく休日返上するほど働き体力も限界ぎりぎりの生活でした。帰宅は常に深夜になり寝に付く時には翌日の仕事の段取りを考えお客様とのトラブル処理や人間関係で悪夢に苛まされては汗ばんで目が覚めるほどの生活でした。

その様に厳しく長い生活が退職と共に解放され毎日が休日となり人々も離れ別の世界で悶々と過ごしている様で、何もしない事がこれほど苦痛を伴うものとは思いもよりませんでした。その時子供の頃より大好きだった草花や庭木の植栽をしようと百二十坪の屋敷に、毎日植木屋さん廻りをしては品種の良い草木を買い集め、早朝から夕方まで草木と戯れる日々となりました。それは一介の会社人間には相当の重労働で、その内百二十坪の屋敷も歩くのも困るほど草木で埋まり石塀の外敷地にも、寒さに強いあじさいや芍薬、球根類を植えこみ、季節毎きれいな花が咲く様消毒や追肥をし、道行く人が欲すれば分けてあげ大変喜ばれて私自身も心より幸せを感じておりました。

しかしながらその労力のあまり疲労が重なり健康診断を受けたところ左腎臓に癌が発見され、早速済生会宇都宮病院で摘出手術、六十七歳でした。退院後は安静維持の日々と再発早期発見の為CT，MRI検査や治療を重ね今日に至っております。



第39回新日美展でホルベイン賞を受賞した蕪木さんの作品

その為草木の手入れも出来ず、荒れ放題となり、妻子は全く興味がなく毛虫に悲鳴を上げるばかりでした。

植木職人にも頼みましたが私の本の知識と相いれず草取り程度にして頂きました。その様な時に二歳下の弟から「兄ちゃん絵を描いてはどうだい」と提案されました。体力もないなか躊躇していましたが幸い私の住む栃木は日光連山や素晴らしい山々と清流に囲まれ、風光明媚な環境を再発見し描いてみようと思いたち現場で観察すると改めて大自然の迫力に圧倒されその感動を絵に現してみようとスケッチを重ねその度毎に大自然のはかり知れぬ力強さを感じ自己の小ささや癌等に固執している気持ちが薄らいできました。そして七十歳にして心機一転油彩画にチャレンジしました。

幸い三十九回新日美展で「厳冬の日光連山」がホルベイン賞を受賞することが出来ました。又今年は栃木支部展も設立されその一員に参加させて頂く幸甚を得ました。これには第一に増野支部長の温かい励ましや私の体調への細かい心遣いによるものと感謝致すばかりです。

絵画に対する基本的心構えや色彩の留意点等のご指導も大きな糧となっております。私は今後とも「絵画はその見たときの感動をいかに筆ではなく心で表すか」を念頭に努めたいと思っております。また支部会員として一人でも多く会員増加に勤めてまいります。お陰様で今年はわたしの呼びかけに一名応じて頂きました。

最後に森屋代表初め委員及び全国の会員の皆様に深く感謝申し上げます。

絵画とのかかわり

大庭由光

会の皆様には日頃お世話になっております。思いがけない原稿依頼の電話を受け、おもわずOKの返事をしてしまったが、果たして何を描こうかと迷いましたが、小生と絵とのかかわり合いについて描くことにしました。

絵は子供の頃から好きで漫画を模写したり、いたずら書きしたりしていたと思います。通信教育でデザインを学んだり、一時期デザイン事務所で働いたこともありました。その後は会社に勤務しましたが、絵を描く事だけは忘れませんでした。

各コンクール等に出品して、出る釘は打たれる状態ですが、絵を描くことが一番好きだという気持ちで今まで来たのだと思います。現在は風景画を描くのが主な制作で、年に数回四季折々の風景を描きに各地に出かけています。

大きな公募展に出品するようになったのは、数年前からで、新日美を知り出品してみようかと思ったのもその頃でした。

第39回新日美展出品の大庭さんの作品

此の度未熟ながら、会員に昇格させていただいたことに感謝すると共に、少しでも自分なりの絵が描けていけたらと思っています。